第二次審査（論文公開審査）結果の要旨

Post-traumatic stress disorder of children with traffic accidents and their parents in Japan

日本における交通事故に遭った子どもとその親の心的外傷後ストレス障害に関する研究

日本医科大学大学院医学研究科　小児・思春期医学分野
研究生　川尻（吉野）　美緒
Journal of Nippon Medical School　第 89 巻　第 1 号（2022）掲載予定

交通事故に遭った子どもとその親は、心的外傷後ストレス障害（Post-traumatic stress disorder:以下 PTSD）や関連する精神症状（うつ、不安症状）を呈することが知られている。本研究では、日本ではまだ明らかにされていない、交通事故に遭った子どもとその親の PTSD 発症率ならびにリスク要因の検討を目的として、質問紙調査を実施した。

2010 年 1 月～2015 年 10 月の間に交通事故に遭い、日本医科大学千葉北総病院に救急搬送され、受傷後 2 か月～6 年を経過している子どもとその親を対象とした。対象児の年齢は、受傷時 3 歳～18 歳とし、2015 年 8 月～12 月の間に、質問紙調査を実施した。PTSD の評価及び受傷時関する尺度として、3 つの指標を用いた。1) PTSSC-15（The 15-item Post-traumatic Stress Symptoms for Children）。子ども本人に回答を求める評価法で、抑うつ因子と PTSD 因子から成る。2）IES-R-J （The Japanese version of the Impact of Event Scale–Revised：改訂出来事インパクト尺度日本語版）。災害や犯罪、事件事故の被害など、多岐にわたる外傷的出来事について使用可能な PTSD の評価法で、本研究では、親の PTSD 症状を評価するために用いた。3) 交通事故時の状況に関する質問紙。入院の有無、入院期間、外来通院の有無、外来通院の期間、受傷後の経過期間について親に回答を求めた。また、カルテから、ISS（Injury Severity Score）についての情報を得て相関分析、分散分析、および重回帰分析を実施した。

79 人の子どもと 104 人の親から回答を得た。受傷時の子どもの年齢は平均 10 歳 8 か月、回答時の平均年齢は 13 歳 7 か月、受傷後の平均経過時間は 2 年 9 か月であった。PTSSC-15 ならびに IES-R-J の得点から，子どもの 10.2%、親の 22.1%が、PTSD のハイリスク群に該当した。子どもと親のストレススコアの間には正の相関があり、事故時の子どもの年齢とは負の相関があった。子どもの事故を目撃した親、子どもが入院した親は、ストレススコアが有意に高かった。ISS、事故後の経過時間とストレススコアの間には、有意な相関がなかった。

本研究により、子どもと親のストレススコアの有意な相関が明らかとなり、子どものストレスには、親自身のストレスが関連していることが示された。また、受傷時の子どもの年齢が低いほど、親の PTSD リスクが高いことが示された。子どもの年齢が低いほど、親が子どもに情緒的にかかわる傾向が高くなることや、事故の原因を自分自身に帰する傾向が強いためと考えられた。さらに、一部の回答者が慢性 PTSD を発症している可能性が明らかとなった。

第二次審査における議論として、1）通院中のメンタルサポートや早期介入の方法論について、2)親子関係の影響について、3)ホルモンや思春期の影響について、4)PTSSC-15 の 2 因子構造の意味と解釈について、などの質疑がなされ、いずれも適切な回答が得られた。

以上より、本論文は学位論文として価値あるものと認定した。